

21世紀に知の回路を開き続ける人 — ドラッカーに学ぶこと —

井坂 康志 (いさか・やすし)

ドラッカー学会 理事



託された知のバトン

2005年5月7日——。この日のことを私は生涯忘れないだろう。誰の人生にも奇跡は起こるものだが、私にとっては、まさにこの日が奇跡そのものだった。

あのマネジメントの父にして20世紀の知の巨人、ピーター・ドラッカーの自宅に赴き、インタビューすることができたからだ。まだ30歳を過ぎて数年の私にとってあまりに大きな出来事だった。わずか30分ほどではあるが、生きて呼吸するドラッカーと握手し、言葉を交わすことができたのだから。

別れ際に「今度あなたについての学会をつくります」と私は伝えた。「楽しみにしています。それが私の望んできたことです」と彼は答えた。

ドラッカー研究がひとつの新段階に入ったのは、2005年、ドラッカー学会の設立時期に重なる。変化というものは必ずその前兆を持つものだが、今にして思えばあのときが始まりだった。あの会見から半年ほど、ドラッカー学会が立ち上がる10日前、あたかもバトンを見届けるかのように、ドラッカーはカリフォルニアの自宅で息を引き取ったのだった。

はからずもドラッカー学会は世界初のドラッカー研究団体となったわけだが、その後、韓国、中国、米国、ドイツなどで、同じ時期に同趣旨の団体が続々と立ち上がっていく。

その感化力は経営者やビジネスマンだけに向けられたものではなかった。ドラッカーはNPOのため

にも書いたし、行政のためにも、国家のためにも書いた。個人のためにさえ書いた。ならば、ドラッカーを総体として普及・顕彰しつつ研究・実践する学会があっていい。それが元経団連の要職を歴任し、ドラッカー著作のほぼすべてを翻訳した学会初代代表・上田惇生氏と私たちが考えたことだった。

大いなる未完

ドラッカーには今なお大いなる未完がある。

あまりに多くの“知的鉱脈”がある。多くは十分に開拓し切れていない。一言で言えば、見極め難いほどの埋蔵量を持つ未採掘の鉱脈の連なりである。

ドラッカーが語ってくれた言葉の中に、次のようなものがある。

「最も大きな変化は、意識に関わるものだ」。

まさにドラッカーの未完性が、現代や未来の人々の意識を魅了し、かつ触発し続けている。今なお人と社会を変え続けているのは、今なお彼が現代人の知られざる意識領域を刺激し続けているからだ。

というのも、ドラッカーは結局のところマネジメントのみで自らの知的世界を構築したわけではない。「^{イコール}ドラッカー=マネジメント」とするほど、彼の業績を矮小化するものはない。

ドラッカーが世に問うた著書・論文は、彼が目に入れた世界についての血の通った記述であって、マネジメントは全体を構成するひとつの要素なのだとということは、強調し過ぎることのない事実である。異なる複数の器楽によるオーケストラの構成に当たって、単独の楽器のみに焦点を当て過ぎることは必ず

全体の音楽的豊かさを損なうことになる。

逆に「それぞれのドラッカー」を過度に標榜するなら、ドラッカーは分析できない、あるいはすべきではないとの狭い観念にとらわれてしまうかもしれない。分析対象たり得ないところが、彼の至高性を説明するとの明らかな誤見にとらわれることにさえなりかねない。そこまでいくと、ある種の世俗的宗教に墮する危惧さえある。ドラッカーに熱狂するあまり、ドラッカー本人の問い合わせにきちんと応答するだけの批評的な目が欠如してしまうからだ。

ドラッカーを知的対象とすることは、まず彼の置かれた時代状況とその内面との連続性を見極めることにある。彼の目に映った世界に業績の意味性と批評性を探求することである。

その意味で、ドラッカーもまた、時代の移り変わりを観察する窓のひとつにすぎない。

触発し続ける思想家

ドラッカー学会は10年を経て、ささやかながらもこの鉱脈の掘削に着手してきた。全国に研究会が12以上、今なお新しい研究会が生まれている。知的成果の最たるものは、2007年以来毎年出され続けている年報『文明とマネジメント』であろう。同誌はドラッカー研究の基幹的位置づけを持つものとして、11号を数えている。掲載論文・論考は300以上に上り、同誌掲載の論文による集成的書物を世に出すこともできた(『ドラッカー——人・思想・実践』三浦一郎氏と共に編著、文眞堂)。

他方でドラッカーは書齋の思想家ではなかった。彼の考えたことを従来のアカデミックな作法で「処理」すれば、たちまちにして意味を失う。

ならば、ドラッカー学会はアカデミックな学会ではないのか。そうではないと思う。ドラッカー学会はアカデミックな学会でもある。ただ「アカデミック」の解釈と範囲、アプローチが違うだけである。

アレクシス・ド・トクヴィルは、「新しい時代は新しい科学を必要とする」と述べた(『アメリカの民主主義』)。ドラッカーの言説の背後には、「20世紀がとうていまともとは言い難い世紀であった」との慚愧がある。手にすべき知識や認識を、手にすべき時に手にできなかった。だから20世紀はあたら「浪費された」のだと彼は考えていた。21世紀、時代に

ふさわしい科学を手にすべく、意識を触発するところが、ドラッカーの最大の狙いだったのはそのためだ。

学習回路を開き続ける人

では、どのような方法か。問い合わせの力だった。しばらく前にベストセラーになった『もしドラ』にもたくさんの有用な問い合わせがある。「顧客って誰だろう?」「真摯さって何だろう?」——主人公のみなみは幾つもの問い合わせを自ら投げ掛けていく中で物語が展開していく。

あの小説が200万以上の読者を獲得した事実ほど、ドラッカーの問い合わせによる触発力が年齢や立場を超えた普遍性を秘めている証左となるものはない。ドラッckerの発言は、現実を変え、何より自らを変えてしまうパワフルな哲学なのだ。

問い合わせを通じた働き掛けを行う点で、マネジメントは意識革命に匹敵する内省と実践を伴うようになる。そしてその働きを私たちが実践し始めると、個人というミクロの世界だけでなく、世界全体に開かれた先端的な意識に通じることになる。個の問い合わせが周囲を動かし、ひとつのムーブメントに発展していくことになる。

人は個でありながらも、社会から切り離されて生きているのではなく、相互に結び付いた存在なのだと考えなければ、やはりマネジメントは実現できない。だから、もう一度引用したい。

「最も大きな変化は、意識に関わるものだ」。

ドラッckerの基本は、読み手の意識、世界観の核を揺さぶり、自己刷新を迫ることにあった。この感化力、触発力は、21世紀の現在、いっそ存在感を増しているように思える。

ドラッckerの原点的問い合わせ、「どうすれば全体主義の再来を招くことなく、自由で機能する社会を手にし得るか」にあったことはあまり知られていない。21世紀をいささかなりとも「まともな世紀」にするにはどうすべきか。これがドラッckerに学ぶ者が手にしたバトンの核を成す問い合わせなのではないかと思う。

今なお知の回路を開かれ続ける人々は後を絶たない。